

# お元気ですか

発行所・(福)横浜市社会福祉協議会  
障害者支援センター

〒231 横浜市中区桜木町1丁目1番地  
-8482 横浜市健康福祉総合センター9階  
TEL 045(681)1211・FAX 045(680)1550  
http://www.yokohamashakyo.jp/siencenter/

編集発行人・森 和雄

2017 / 9

## 様々な障害のある人へ ますます求められる適切な配慮 『活動ホームひの』新しいメンバーの話

この四月から「港南  
地域活動ホームひの」

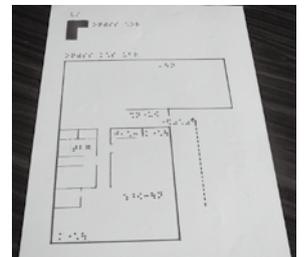
通所開始まで  
「ひの」では

(以下「ひの」)通所部  
門に新しい仲間が二人  
加わった。その中のお  
一人、新倉優香さんは  
視覚に障害がある。三  
月まで横浜市立盲特別  
支援学校(神奈川県)  
に通っていたが、先生  
の紹介で自宅から近い  
「ひの」を利用するこ  
ととなった。三年生の  
時にここで実習を行い、  
その時、丁寧に支援し  
てもらった印象があ  
り、「ひの」に行きた  
いと思ったそうだ。

新倉さんは強い光で  
も判別が難しい。「ひ  
の」ではそのような状  
況の方の支援は初めて  
の経験だったので、職  
員の藤川さんと東さん  
が、学校での様子を見  
学に訪れることにした。  
学校ではトイレの場所  
がわかるように、手す  
りにロープを巻き、凹  
凸の感触を利用した目  
印がついていたが、「ひ  
の」では点字シールを  
貼ることで対応。移動  
の誘導方法も学校の先



新倉優香さん。今日は、フラワーアレンジメントのプログラム。花の形や長さを手で確かめながら生けていく。



(写真①) 黒色の部分が浮き上がっており、文字は点字で書かれている。

生から教えてもらった。  
学校では

担任の先生も新倉さ  
んを応援している。黒  
色の部分が立体的に浮  
き出る特殊な印刷機を  
使い「ひの」の見取り  
図(写真①)を作成。

この凹凸を手で確かめ  
ながら、建物のイメー  
ジをつかむのだそう  
だ。担任の先生は、こ  
の見取り図を通所開始  
までに覚えるという宿  
題を出したといい、「新  
倉さんはしっかりと覚  
えてきました」と職員  
の藤川さん。

### 毎日の過ごし方

当初は緊張も見られ  
たが、次第に「ひの」  
の活動にも慣れて来た  
様子。体力面での心配  
もあったが、休まず通  
所している。好きな作

業は、ポスティング  
とのこと。  
この良い所は、  
「ゆっくりしている  
ところ」と新倉さん  
は語る。新倉さんは  
自分の意思や意見を  
言うのが少々苦手のよ  
うだが「自分でしたい  
事」や、「他の人にし  
て欲しい事」を言える  
ようになるのが今の目  
標とのこと。そんな新  
倉さんのペースにとて  
もあっているようだ。

外食のプログラムで  
は、好きなポテトを注  
文した。また、運営委  
員長が入院した際、通  
所者でお見舞いの「し  
かし」を作成したが、  
新倉さんは、点字で手  
紙を書いてみたそうだ。

休みの日には、学校  
時代の友人と携帯電話  
の音声読み上げ機能を  
使いメールのやり取り  
もしている。

様々な障害のある方  
が活動できるよう、ま  
すます現場での適切な  
配慮が求められる。

## 望遠鏡

七月二十六日  
障害のある人十  
九名の命がうば  
われ、二十七名  
が傷つけられた  
津久井やまゆり  
園の事件から一

年がたちました。この  
事件をおこしたのは、  
障害のある人たちの援  
助に携わっていた元職  
員でした。多くの人た  
ちがこのことに衝撃を  
受けたことと思います。  
この職員は「障害者  
なんていなくなればい  
い」「障害者是不幸を生  
み出すことしかできな  
い」と考えていました。  
援助者として、日々、障  
害のある人たちの援助  
に携わる立場にあった  
人が、どうしてこのよ  
うに考えるに至ったの  
でしょうか。

このようなまちがっ  
た考えを持つようにな  
った背景には、障害の  
重い人たちが地域で暮  
らしつづけることがで  
きず、入所施設にはい  
りながら、現実が大  
きく関わっているの  
ではないかと思えます。

私たちは、七月二十  
六日を忘れることな  
く、地域とともに生き  
る社会を目指して努力  
していかなければなら  
ないと思えます。

(横浜市グループホー  
ム連絡会 室津滋樹)

# 中・長期の見通しをもって 第三期障害者プラン・これからの三年間 第六回自閉症懇談会を開催

自閉症者の進路や暮らしについて家族、福祉、教育、行政関係者が共に考える第六回自閉症懇談会（支援センター主催・座長・谷口政隆氏・平成二十六年発足）が今年八月に開催された。

今年度は「第三期横浜市障害者プラン」（以下、第三期プラン）の中間振り返りと後期三年間にむけた検討が行われる。今回は横浜市



から、プランの今後の方向性や現在行われている種々の検討の状況を伺い、議論した。

一方、平成二十八年度から二次相談支援機関の二施設で「ミドルステイモデル事業」を実施。二次相談支援機関の相談機能と入所施設の短期入所を連動させる取り組みを進め、今年度から検証予定である事も報告された。

「者支援センタースタッフが家庭などを個別訪問する事も視野に入れて欲しい」と語る。機能強化型活動ホーム「むつみ」の佐藤氏も同様の意見を述べた。

今回の議論では、「地域で提供されている支援に対し、外部の客観的な評価と助言が自動的に入る仕組み」、「幼少期からの一貫した支援の提供。特に家庭へ赴き障害児者の地域生活と家族を支援する事」の重要性も提起された。

## ▼依然として 変わらないニーズ

横浜市の平成二十四年度調査ではグループホーム、入所施設の待機者六五一名中約半数以上を行動障害のある方が占め、その傾向は現在も大きく変わらない。

平成二十九年度特別支援学校等卒業予定生徒七六四名の内、自閉スペクトラム症の方は約半数（「進路対策研究会」調査）を占め、今後数年は同様の傾向を示している。

八島氏（家族）は「地域生活継続のために、暮らしのあらゆる場面で必要な支援が入るべき」と語り、宍倉氏（家族）は「現状や今後も予想される圧倒的なニーズに対応するためには、社会資源の整備は急務。何より幼少期から、家庭や地域の様々な社会資源に適切な支援が入る仕組みが必要ではないか。今後、予防的な支援が極めて重要となる。例えば療育センターや発達障害

や引継ぎにより、行動障害を予防する手立てがあるのではないか。また、福岡市のモデル事業の例など、人材育成と支援体制の整備が必要」と広義なアセスメントの重要性を訴えた。

第四期障害者プランも視野に入れた中・長期の見通しを持ちながら、当面の施策を検討し、各施策が有機的に連動していく事が望まれる。

## ▼現場の課題

横浜市の説明を受け、委員からは現場の諸課題が提起された。障がい者生活支援施設「花みずき」の原田氏は「相談機能の充実にもむけ、現場経験のある職員を配置する必要がある。その結果、現場の人手が手薄になり、運営が大変厳しい」と訴える。

▼圧倒的なニーズへの対応と  
幼少期からの支援を  
八島氏（家族）は「地域生活継続のために、暮らしのあらゆる場面で必要な支援が入るべき」と語り、宍倉氏（家族）は「現状や今後も予想される圧倒的なニーズに対応するためには、社会資源の整備は急務。何より幼少期から、家庭や地域の様々な社会資源に適切な支援が入る仕組みが必要ではないか。今後、予防的な支援が極めて重要となる。例えば療育センターや発達障害

者支援センタースタッフが家庭などを個別訪問する事も視野に入れて欲しい」と語る。機能強化型活動ホーム「むつみ」の佐藤氏も同様の意見を述べた。

第四期障害者プランも視野に入れた中・長期の見通しを持ちながら、当面の施策を検討し、各施策が有機的に連動していく事が望まれる。

## ▼横浜市から

横浜市の平成二十四年度調査ではグループホーム、入所施設の待機者六五一名中約半数以上を行動障害のある方が占め、その傾向は現在も大きく変わらない。

平成二十九年度特別支援学校等卒業予定生徒七六四名の内、自閉スペクトラム症の方は約半数（「進路対策研究会」調査）を占め、今後数年は同様の傾向を示している。

八島氏（家族）は「地域生活継続のために、暮らしのあらゆる場面で必要な支援が入るべき」と語り、宍倉氏（家族）は「現状や今後も予想される圧倒的なニーズに対応するためには、社会資源の整備は急務。何より幼少期から、家庭や地域の様々な社会資源に適切な支援が入る仕組みが必要ではないか。今後、予防的な支援が極めて重要となる。例えば療育センターや発達障害

者支援センタースタッフが家庭などを個別訪問する事も視野に入れて欲しい」と語る。機能強化型活動ホーム「むつみ」の佐藤氏も同様の意見を述べた。

第四期障害者プランも視野に入れた中・長期の見通しを持ちながら、当面の施策を検討し、各施策が有機的に連動していく事が望まれる。

## ▼横浜市から

横浜市の平成二十四年度調査ではグループホーム、入所施設の待機者六五一名中約半数以上を行動障害のある方が占め、その傾向は現在も大きく変わらない。

平成二十九年度特別支援学校等卒業予定生徒七六四名の内、自閉スペクトラム症の方は約半数（「進路対策研究会」調査）を占め、今後数年は同様の傾向を示している。

八島氏（家族）は「地域生活継続のために、暮らしのあらゆる場面で必要な支援が入るべき」と語り、宍倉氏（家族）は「現状や今後も予想される圧倒的なニーズに対応するためには、社会資源の整備は急務。何より幼少期から、家庭や地域の様々な社会資源に適切な支援が入る仕組みが必要ではないか。今後、予防的な支援が極めて重要となる。例えば療育センターや発達障害

者支援センタースタッフが家庭などを個別訪問する事も視野に入れて欲しい」と語る。機能強化型活動ホーム「むつみ」の佐藤氏も同様の意見を述べた。

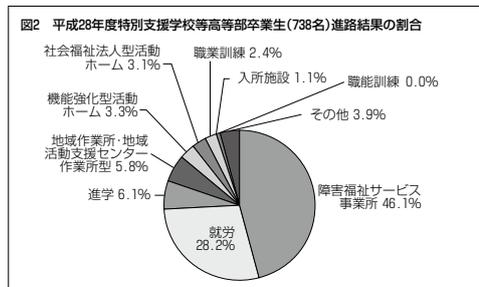
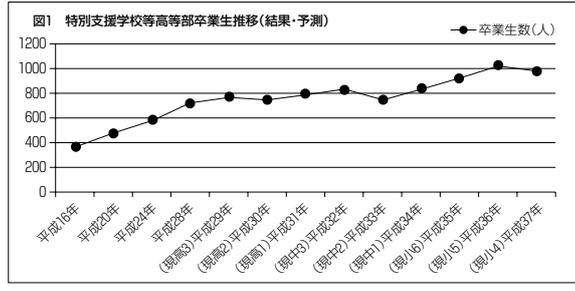
第四期障害者プランも視野に入れた中・長期の見通しを持ちながら、当面の施策を検討し、各施策が有機的に連動していく事が望まれる。

「自閉症懇談会」当日参加者（敬称略、順不同）  
谷口政隆（座長・神奈川県立保健福祉大学名誉教授）  
中野美奈子（横浜市自閉症児・者親の会会長）  
宍倉孝（横浜市自閉症児・者親の会）  
八島敏昭（横浜市自閉症児・者親の会）  
中村公昭（千代田区立障害者就労支援施設ジョブサポート・プラザちよだ 所長）  
赤川真（NPO法人新 総括責任者）  
斉藤達之（つるみ地域活動ホーム幹 施設長）  
原田淳（花みずき 施設長）  
佐藤毅（南福祉ホームむつみ 所長）  
西尾紀子（横浜市発達障害者支援センター 発達障害者地域支援マネジャー）  
米澤宏彰（横浜市健康福祉局障害企画課 施策推進担当係長）  
松浦拓郎（横浜市健康福祉局障害福祉課 地域活動支援係長）

平成二十九年進路対策研究会 調査結果  
 卒業生八〇〇名に近づき  
 七年後には一、〇〇〇名超へ

平成二十八年  
 卒業生進路結果

特別支援学校等卒業生は急激に増加しており、生徒数の推移は図1のとおり（※小中学校は、個別支援級在籍生徒数もカウント）。平成二十九年（現高三）は七六四名、平成三十二年（現中三）には八〇〇名余、平成三十六年度（現小五）には一、〇〇〇名を超える見通し。



平成二十八年卒業生（七三八名）の進路先は図2のとおり。生活介護が一割強、就労移行支援・就労継続支援事業が三割弱など、障害福祉サービス事業所が計五割弱。また作業所型、機能強化型・社会福祉法人型活動ホームなどが一割強と、福祉系の活動場所への進路は合わせて約

六割弱（四三〇名）。就労した卒業生は三割弱（二〇八名）で昨年度より微減。一割は施設入所支援や進学、職業訓練などだ。

◆平成二十九年「進路対策研究会」委員長 相田泰宏氏（横浜市立上菅田特別支援学校）より

五年前は五七三人だった高等部三年生が、現在は七〇〇人を超え、さらに七年後には一、〇〇〇人を上回ります。

企業での障害者雇用の枠は拡大し、障害者も就職しやすい時代になりつつありますが、短期間で離職してしまいうケースも少なくありません。環境の整備や一貫した支援体制の構築が求められます。

多くの生徒は生活面や身体面での支援を必要としているため、福祉サービスを利用していません。障害が重い生徒ほど進路先は限られ

ています。そのような生徒は社会参加できる機会や場所が少ないため、進路先が見つからないと、家以外に自分の居場所がなく、また家族以外に接する人もいない、社会から孤立した存在となってしまっています。

地域や社会とかわり続け、自ら望む生活を選択できる、そんな当たり前のことが障害によって妨げられることがないよう、横浜市の更なる支援と私たち関係機関の努力が強く求められています。

\*進路対策研究会  
 昭和五十九年（一九八四年）より横浜市内在住の生徒が通う盲・聾・特別支援学校、養護学校、サポート校、技能連携校、高等専修学校、フリースクール等四十三校（分教室を含めると五十八校）の進路担当者及び行政担当者、教育委員会担当者が集まって進路に関する調査、諸問題の検討を行っている。

せや福祉ホーム  
 三井さんと大島さん  
 優しいまなざし

夏の風物詩、高校球児やアイスの絵を描く利用者さん。その傍らに、優しいまなざしで見守る三井尚子さんと大島佳子さん。

おふたりは、せや福祉ホームの生活プログラムと余暇活動で月二回美術を担当されているボランティアさん。

美術に造詣が深い三井さんは、非常動を経てボランティアに。利用者さんの話し相手をという誘いがきっかけでボランティアとなった大島さん。三井さんの補助をするうちに美術専属となった。

ステンシルの刷毛をうまく持てなかった利用者さん。徐々に力の入れ方を覚え、絶妙な

タッチで描く姿に驚かされたことも。また、気持ち言葉をうまく伝えられない利用者さんは、作品で想いを表現され、心を開放している様子が伝わった。」「作品をとおして、利用者さんと対話をする喜びがある」とおふたりは話される。

「上手い下手の評価ではなく、職員さんが自然に発する共感の声かけが、みなさん何よりうれしそうで」とも。三井さん、大島さんも制作を見守り、常に優しく声をかける。その様子がまた心地よい。

大島さん(左)

三井さん(右)

### 第三者によるモニタリングでグループホームの実践を共有しよう！ 〜グループホームモニタリング活動研修会開催〜

標記研修会が六月二十三日に開催された。

この研修はモニタリングを受けたグループホーム（以下GH）の実践やモニタリング委員の報告を他のGH職員やモニタリング委員で共有し、今後を展望するもの。

「将来、独立した生活を望む利用者にとって地域の一員として地域に関わることは大切な経験かと思う。地域の方々に障害を正しく理解してもらおうきっかけにもなった」と話す。

#### 独立した

#### 地域生活をめざして

#### ハイムさんか

（社会福祉法人うしおだ）

ここは、精神障害のある方々が独立した地域生活をめざす通過型のGH。建物はアパートタイプだ。

利用者の日常生活の大半は、GHと病院や日中活動先の往復に費やされていた。そのような中、職員が「そもそも地域生活とは？」と考え始め、町会長と相談。「地域を知り、

#### 支援の標準化 サンフィールド そよかぜ二番館

ここは知的障害のある方々が暮らすGH。法人としての運営は六

ホーム。管理者の鈴木さんは「本人が心地よく暮らせ、離れて暮らすご家族にも安心して

してもらえることを大切にしている」と言う。

スタッフがどのホームでも共通した支援ができるよう基本的な事はマニュアル化してある。服薬管理の仕方や設備面ではシステムキッチン

の規格、備品管理場所の共通化など、支援の標準化を目指している。

松下さん社会福祉士  
個の生活が意識されている。入居者と職員は良い距離感を保っている。待つことの大切さ、焦らない支援が実践されていた。

音田さん家族の立場  
メンバー同士、自然な形で助け合い、良い笑顔が見られた。

支援体制の統一化に関する配慮があり、スタッフ同士のサポート体制も良い。

ご自身も十二年前からモニタリング委員として活躍し、この日、研修の司会を務めた青木弁護士は「モニタリングで実践が集まり、研修を通して訪問をしていない委員や職員とも内容を共有できる。

このような取り組みが広がるとうい」と語る。多くの方とGHの実践を共有できるモニタリング活動。今後も推進したい。

平成29年度モニタリング活動に伴う研修会  
【第1部】  
「グループホームの実践報告とモニタリング活動」  
1. 主に精神障害のある方への支援の実践をおして  
河野崇宏氏  
（社会福祉法人うしおだ ハイムさんか管理者）  
松下圭一氏/音田園恵氏（モニタリング委員）  
2. 主に知的障害のある方への支援の実践をおして  
鈴木久美子氏  
（社会福祉法人そよかぜの丘  
サンフィールドそよかぜ二番館管理者）  
坂本真史氏（モニタリング委員）  
【第2部】  
参加者によるグループディスカッション

※モニタリング活動とは  
「モニタリング活動」は、第三者であるモニタリング委員が、障害のある人のGHや日中活動場所を訪問し、その運営や援助内容に、人権尊重の姿勢が守られているか、また実際に人権が守られているかを見守る活動。モニタリング委員は、当事者、家族、弁護士、社会福祉士、精神保健福祉士、学生、市民など、様々な立場の方で構成されている。二十八年度のGHモニタリング活動は二十八ホーム実施。関わったモニタリング委員はのべ五十六人。

#### 鶴見・ふれあいの家 おもちゃ文庫開始！

おもちゃを通して、地域の子どもや家族との交流を図る「おもちゃ文庫」。この月から、ふれあいの家（鶴見区）でもスタートした。機能強化型地域活動ホームの中で七館目。

区内で活動する訓練会の方を中心に、十組の親子が来場。オープニングイベントとして企画された幼児向けの人形劇では子どもたちは人形の動きを目で追

い、声を上げて楽しんでいた。おもちゃは、家庭では用意しにくい本格的な木製のおまごとセットなどを用意したこともあり「家にはないおもちゃで遊ぶ機会ができてよかった」と家族からも好評だった。

地域とのかかわり  
おもちゃ文庫の開始に向け、ふれあいの家では四月後半から周知を開始。運営委員長や区役所の協力を得て、地域の回覧板やチラシなどを活用して呼びかけを行った。来場した地域の方からは「活動ホームは主に成人の方が通所するところ、というイメージがあったけれど、子ども向けの事業もやっているんですね」という感想も寄せられた。

ふれあいの家が鶴見区で開所して三十四年。今後、地域の子どもと家族が自由に集える場としても、ますます重要な拠点となる。



人形劇の合間に、音楽に合わせて手遊び

# 地域の見まもりの大切さと

## その充実をめざして 〜横浜市障害者後見の支援制度〜

この三月、全区で後見の支援室（以下、支援室）が開設された。

障害のある人が自分らしく、地域で安心して暮らしていくために、支援室の実践は続く。更なる支援の充実をめざし、五月一九日、全支援室のスタッフを対象に研修会が開催された（百十名参加）。

### 住民目線と

### 地域の力が大切

支援室の実践を長く見守っている訪問の家

#### <全体研修の内容>

1. 地域での見まもりの充実をめざして  
社会福祉法人 訪問の家 理事 松田 米生氏  
栄区後見の支援室 とんぼ 責任者 庄司 晃洋氏
2. 後見の支援室の実践
  - (1)一人暮らしをしている登録者の見まもり  
金沢区障害者後見の支援室 帆海  
担当職員 岩永 美恵子氏
  - (2)高齢の両親と暮らす登録者の見まもり  
緑区障がい者後見の支援室 みどりのこかげ  
あんしんマネジャー 岩澤 彩子氏

理事の松田さん。「地域で普通の暮らしを続けるには、住民目線の見まもりが大切。その事を改めて痛感した」という。

責任者の庄司さんも「自分たちの地域を自分たちで良くしていこうという地域の力を信じている。地域の真剣さに向き合い、丁寧に関わっていく事が大切」と今までを振り返る。

「帆海」その実践  
団地で一人暮らしをしている知的障害のあるAさん。初めはあんしんキーパー（以下、キーパー）を積極的に希望していなかった。しかし、支援室が訪問を続ける中で「地震の時に助けてくれる人が近くにいと安心」という話をし始めた。そこで支援室は、Aさんが名前を知ってい



支援室の実践を語る岩永さん（左）と岩澤さん

た自治会長さんにキーパーを依頼し、快諾いただいた。自治会長さんは、Aさんの事を常々、気にかけて、同じ棟の方にその様子をさりげなく聞いていたという。

担当職員の岩永さんは「地域の方がさりげなく、気にかけてくれていた事が分かった。さりげない見まもりが安心した生活につながれば」と語った。

「みどりのこかげ」その実践  
高齢の両親と三人暮らしのBさん（知的障害）。頼れる親族が近くにおらず、本人の事を見まもってくれ人が身近に欲しいという話があった。キーパーを探すため区社協に相

談、地区社協の会合で制度説明・相談をした。すると、Bさんの地区の民生委員さんが名乗り出てくれ、キーパー登録に。

Bさんは「道で会って挨拶をしたり、防災訓練や運動会、団地のパトロールに誘ってもらい参加した」とその後を話してくれる。

また、Bさんは「団地の花壇に花を植え、感謝の気持ちを伝えたい」とも話しているという。それを聞いたあんしんマネジャーの岩澤さんは「Bさんの地域への愛着を感じた。地域で安心して長く生活していく際、それは大切な事と、しみじみ思う」と語った。

※あんしんキーパー  
身近なところで本人をさりげなく見まもる人。本人や家族の希望を伺い、後見の支援室が地域の人たちに働きかけ、登録していただく。また、既に本人のことをよく知っている人に登録していただく場合もある。



地域活動支援センター たんぼぼ（南区）  
松村洋子さん  
朝比奈友己枝さん

お二人とも、最初は緊張した面持ちでの取材であったが、笑顔でお話をしてくださった。

松村さんは、現在、ダイエツトのために運動を頑張っている。たんぼぼでは、ポスティングの仕事を行い、万歩計を携えて一日一万歩を目指す。室内でもタイマーを使って十分間の運動をし、帰りは時折ヘルパーさんと歩いて帰るなど、暑い中頑張っている。

そんな松村さんは、「瘦せたらおやつや、おせんべい、あんこのもち、ゆで卵が食べたい」と話します。

たんぼぼでボランティアさんが読んでくれる紙芝居や、「渡る世間は鬼ばかり」を観ること、夏休みの家族旅行などが好

きで、充実した毎日をごさされている。

朝比奈さんには、休日の好きな過ごし方についてお話ししていただいた。お買い物をする事、カラオケや映画、落語やお祭りに行くことなど、休日にはほぼ毎回外出をして楽しんでる。

その中でも最近、南区でディスコ大会があり、仮装をしてきたことが楽しかったようで、来年の仮装は何にするか、今から構想を練っている。

朝比奈さんはお笑いも好きで、今回の取材の中でも、周りを笑いに誘いながらお話ししてくれた。



▲朝比奈友己枝さん



▲松村洋子さん

# あゆみ荘 だより

## バスケットボール 教室を開催！



選手と参加者全員で記念撮影

六月二十四日(土)、プロバスケットボールBリーグ『横浜ビー・コルセアーズ』の選手とスタッフを講師に迎え、余暇活動支援事業『障害のある方のためのバスケットボール教室』を横浜あゆみ荘および都筑地区センターにて開催しました。

この事業は、『横浜ビー・コルセアーズ』の全面協力のもと、隣接する都筑地区センターとの共催事業として実施。市内在住の障害のある方二十二名と支援者総勢三十五名の参加者が楽しい時間を過ごしました。

プロバスケットボール選手の熱い指導のなか、参加者の皆さんは、パス・ドリブル・シュート練習でコツをつかみ、その後のミニゲームでさわやかな汗を流しました。

参加者からは「プロの選手と練習や試合ができてとても良かったです」ととても楽しかったので来年もやってください、「他のスポーツもやってほしいです」「ダンスや音楽教室もやってくれると嬉しいです」などの楽しかった感想を寄せてくれました。

あゆみ荘では、今後も余暇活動支援事業を実施し、障害のある方々が様々な体験ができるよう取り組んでいきますので、是非ご参加ください。お待ちしています。

### 全客室の全面禁煙について

これまで客室では洋室のポプラ、アカシアの二部屋のみを喫煙ができる部屋としていました。しかし、禁煙は社会的な要請となっており、受動喫煙など喫煙に伴う健康の悪影響や公共施設として禁煙に対して積極的な役割を果たしていくため、平成三十年一月より全客室禁煙とさせていただきます。

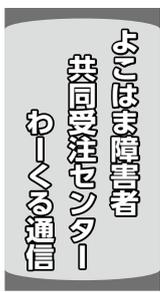
なお、館内での喫煙は、二階ふれあいホールに設置しています喫煙室をご利用ください。皆さまのご理解、ご協力をお願いいたします。

### 年末年始の休館及び、施設点検整備のための臨時休館のお知らせ

● 年末年始の休館  
平成二十九年十二月二十八日(木)から平成三十

十年一月三日(水)まで  
● 施設備点検に伴う臨時休館  
平成三十年一月二十三日(火)から二月一日(木)まで

お問合せは、横浜あゆみ荘まで  
☎(941)8383



受注センターわーくるでは、様々な作業の受発注をコーディネートしています。今回は、その一例を紹介します。  
**街区表示板点検・補修等作業**

電柱に掲示されている青いプレートでお馴染みの住所を示した「街区表示板」。この表示板の点検と補修作業を障害者支援事業所(以下「事業所」)が行っています。

横浜市市民局から依頼があり、受注センターわーくるが受注



コーディネート、十九箇所の事業所が市内全域の二十の町で作業に取り組んでいます。

古い表示板は、塗料の色落ちなどで文字が見えにくくなったものがあります。これらを一枚一枚点検し、見えにくい文字は白ペンキで塗装し、また、無くなっていないかの確認も併せて行っています。自分たちが作業したものが外にあると嬉しい

六月から作業を開始した事業所を訪問しました。車や人に気を配りながら、分担して作業に取り組んでいます。

作業するメンバーは、「自分たちがやっ

**【問合せ先】**  
よこはま障害者共同受注総合センターわーくる  
☎306-9910  
ホームページアドレス  
<http://www.yokohama-juchuu.jp>

じゅちゅーくん

たものが、外にあると嬉しい」「これ(街区板)をやったんだと話す」と、すごいと言われる」「町内の人に暑いのに頑張ってるねと声を掛けられる」など、責任もつて取り組もうという様子と、作業を通してのやりがいを話してくれました。「誰もが見るもので、形に残る作業なので、やりがいがあるようです」と職員は作業を見守りながら話してくれました。

来年度以降は、更に多くの町内で実施される予定です。